

●能『鷹姫』●狂言『樅山節考』
狂言劇場 特別版

Aプログラム

狂言「呼声」

狂言「樅山節考」

狂言「呼声」

居留守を使い家から出てこない太郎冠者を、主人と次郎冠者は、あの手この手でおびき出そうとするのだが…。太郎冠者を出てこさせようと、次から次へいろいろな節の謡を謡っているうちに、どんどん盛り上がりつつあるところが見どころです。

狂言「樅山節考」

おりんの村には、70歳になると供の者に背負われて深い山奥の「樅山さん」へ行き、二度と戻らない「樅山まいり」の風習があった。当年69歳のおりんは、一日も早く樅山まいりに行こうとするのだが、孝行息子の辰平は複雑な心境である。一方、辰平の息子けさ吉は、自分の子供が生まれるのが近いこともあり、おりんに早く樅山まいりに行った方がいいという。村には70歳になってもなかなか樅山へ行こうとしない又やんのような者もいる…。

舞台は、主人公・おりんの回想を交えた形で展開します。野村万作が門弟とともに、笑いの要素が一切ない、シリアスな作品世界を狂言の手法で描き出します。原作・深沢七郎、脚色・岡本克己、演出・野村万作。

Bプログラム

舞囃子「三番叟」

舞囃子「山姥」

能「鷹姫」

舞囃子「三番叟」

三番叟とは、能の『翁』の後半に狂言方が演じる舞のことで、五穀豊穡を祈る。通常の三番叟は剣先烏帽子に直垂の装束をまとい、「鈴ノ段」では黒式尉の面をかけます。今回の舞囃子では紋付袴を着て直面で三番叟（様ノ段・鈴ノ段）を踏みます。

舞囃子「山姥」

月の光の中、鬼女・山姥が春夏秋冬の山の景色を語りながら山谷を駆け巡る…。能『山姥』のクライマックスを、紋付袴姿で舞います。

能「鷹姫」

物語の舞台は絶海の孤島。飲むと永遠の命を得ることができるという「不老長寿の泉」を巡り、その泉の守り役の鷹姫、何十年の間、泉から湧く水を待ち続ける老人、そして、新たに水を求めに来た若き王子・空賦麟、それぞれの水を求める苦悩を嘆き謡う…。

今から100年以上も前、ノーベル文学賞を受賞したアイルランドの詩人ウィリアム・バトララー・イエイツは能の世界に影響を受け、劇作品『鷹の井戸』を執筆しました。その後この作年として生まれ変わり、今日まで演じました。この度は萬斎版の新たな演出でおおくりします。原作・W・B・イエイツ、作・横道萬里雄、演出・野村萬斎。



能 『鷹姫』														舞囃子 『山姥』							舞囃子 『三番叟』				B プロ		狂言 『樅山節考』														狂言 『呼声』		A プロ			
太鼓	大鼓	小鼓	笛	地謡	地謡	地謡	地謡	地謡	地謡	地謡	地謡	地謡	空賦鱗	鷹姫	老人	太鼓	大鼓	小鼓	笛	地謡	地謡	地謡	地謡	仕手	大鼓	脇鼓	脇鼓	小鼓頭取	笛	仕手	太鼓	笛	子供	鳥	村人	村人	村人	又やんの倅／雨屋	又やん	けさ吉	辰平	おりん	次郎冠者	主	太郎冠者	
小寺真佐人	亀井広忠	鶴澤洋太郎	竹市 学	野村太一郎	飯田 豪	内藤 連	中村修一	高野和憲	深田博治	坂口貴信	坂 真太郎	鈴木啓吾	観世喜正	野村萬斎	大槻文蔵										亀井広忠	清水和音	古賀裕己	鶴澤洋太郎	竹市 学	野村裕基			松田弘之 (数色)	野村萬斎	飯田 豪	内藤 連	岡 聡史	石田幸雄	中村修一	月崎晴夫	高野和憲	深田博治	野村万作	中村修一	内藤 連	野村萬斎
大川典良	原岡一之	鶴澤洋太郎	竹市 学	野村太一郎	飯田 豪	内藤 連	中村修一	高野和憲	深田博治	大槻裕一	坂 真太郎	鈴木啓吾	観世喜正	野村萬斎	片山九郎右衛門	大槻文蔵	大川典良	原岡一之	鶴澤洋太郎	竹市 学	大槻裕一	坂 真太郎	寺澤幸祐	鈴木啓吾	観世喜正						栗林祐輔 (数色)	野村萬斎	飯田 豪	内藤 連	岡 聡史	石田幸雄	中村修一	月崎晴夫	高野和憲	深田博治	野村万作	内藤 連	野村太一郎	野村萬斎		
大川典良	亀井広忠	鶴澤洋太郎	竹市 学	野村太一郎	飯田 豪	内藤 連	中村修一	高野和憲	深田博治	大槻裕一	坂 真太郎	鈴木啓吾	観世喜正	野村萬斎	片山九郎右衛門	大槻文蔵								亀井広忠	清水和音	古賀裕己	鶴澤洋太郎	竹市 学	野村裕基			栗林祐輔 (数色)	野村萬斎	飯田 豪	内藤 連	岡 聡史	石田幸雄	中村修一	月崎晴夫	高野和憲	深田博治	野村万作	中村修一	野村太一郎	野村萬斎	